

米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究：ヒトの身体の扱いに焦点を当てて

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学 公開日: 2017-06-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 日高, 翼 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00010188">https://doi.org/10.14945/00010188</a>

(課程博士・様式 11)

最終試験の結果の要旨及び審査委員 報告書

学籍番号	30440002	氏名	日高 翼
論文題目	米国ハイスクールにおける「生物学」の成立過程に関する研究 —ヒトの身体の扱いに焦点を当てて—		
論文審査結果	合格		
最終試験結果	合格		
最終試験 審査委員	審査委員長 小南 陽亮 委員 稲毛 正彦 委員 新保 淳 委員 野地 恒有 委員 丹沢 哲郎 委員		

(最終試験の結果の要旨、1,000 字程度)

最終試験では、はじめに学生より 30 分間の発表があり、引き続き研究の内容について審査委員より 60 分間の質疑が行われた。

質疑の中では、国内外を問わずこれまでの理科教育史研究が切り込めなかった分野で大きな成果を挙げたこと、特にハイスクール生物学の成立過程とそれに影響を与えた要因を、その前駆科目であった「自然誌」「動物学」「植物学」「生理学」の教育目標や教授内容に焦点を当てて、詳細に分析した点が高く評価された。

審査会においては、当時の学術動向（ダーウィン・メンデルなど）の影響を生物学関連諸科目がどのような影響を受けたかや、日本において基盤が形成されたとされる昭和 40 年代前後の生物教育の動向、1 章から 4 章において抽出された変遷要因のフレームワークの妥当性、これからの生物教育への貢献、過去の生物教育変遷の分析から得られる「学ぶべきではない点」、そして分析に使用した資料の内容等、多面的な視点から質疑が行われた。これらの質問に対して学生は、別に用意されたパワーポイント資料なども活用しつつ、簡潔かつ適切に説明を行った。

試験では、研究の今後の課題についてもいくつか指摘がなされた。特に、本研究が用いた研究ロジックについては重要な指摘であり、変遷要因の抽出が現在のフレームから過去を見て行われており、当時だからこそ影響を与えたであろう要因の抽出が期待されるとの指摘があった。

博士論文の審査ならびに本試験の結果を受けて、本審査委員会は、教科開発学研究としての適切性や研究のオリジナリティー、先行研究から見た成果の妥当性と新規性、研究の論理構成、そして研究の発展可能性などの観点から、学位論文審査結果を「合格」と判定した。

審査委員長

小南 陽亮

